

## 大平正芳氏の国際感覚

山岸 一平

池田内閣（一九六二—六四年）と田中内閣（一九七二—七四年）の二度、外相を務めたが、長い政治生活の中で最も充実した楽しい時期だったように思う。盟友だった田中元首相はよく「大平君は外交が好きなんだよ」と言っていたが、国際問題に人一倍の関心と興味を持っていたことはまちがいない。

内閣改造を控えた一九六二年の夏、当時の池田首相は私邸に大平、前尾繁三郎（元衆院議長）、田中角栄という三人の側近を招き、外相、蔵相、自民党幹事長のポストを提示し、三人で話し合つて分担するよう指示した。大平外相は瞬時に決まったが、田中蔵相、前尾幹事長に落ち着くまでには多少時間がかかったという。七二年の七月五日、自民党総裁に選出された田中氏は、その夜、大平氏一人を秘密のアジトだったホテルオークラの一室に招き密談した。当時、まだ現役の政治記者だった私などは、新総裁が行方不明になったと大騒ぎした思い出がある。この時、「明後日に田中内閣を発足させるが、外交は全て君にまかせる。名目上の副総理は三木武夫君だが、実質は君だ」と述べて外相就任を要請、大平氏も快諾している。

国際感覚が豊かだったのは、高松高商（現香川大学経済学部）、東京商大（現一橋大学）という国際人の養成を一つの目的として語学教育を重視した学校の出身ということも影響していよう。それ以上に敬けんなクリスチャンだったことが、国際感覚の中身と密接に関係しているように感じられる。高松高商に入学

して間もない一八歳の時、キリスト教の伝道を目的とした「イエスの僕（しもべ）会」に入り、生涯ミッション活動の深い理解者だった。東京商大に入る前の一年間は現在の桃谷順天館に入社し、実際に実践活動を経験している。

## 人類愛が大平外交の基本

人類愛、博愛主義といったキリスト教の教義が大平外交の基本でもあった。池田内閣の外相として、はじめて国連総会で演説した時、イデオロギーの対立によって生じている東西問題だけでなく、貧富の差の激しい南北問題の解決に努力すべきことを強調した。国会の外交演説でも、米ソの両超大国を頂点とする自由主義陣営と社会主義陣営の対立の緩和以上に、先進国と低開発国との生活水準の格差是正の必要を力説した。当時、東西問題のみならず、南北問題の処理を最重点にかかげた外交家は、きわめてユニークな存在であったことはたしかである。

大平氏は自民党という保守党の政治家だったが、いわゆる「ハト派」に属し、右寄りの「タカ派」とは常に一線を画していた。日米関係重視の姿勢はくずしたことはなかったが、社会主義諸国との無用な摩擦はできるだけ避けるという方針を貫いた。特に、隣国、中国との関係改善には気を使い、国交が樹立される以前も、親中国を代表する政治家、古井喜実氏らの行動を陰に陽に支援した。田中内閣の外相として一挙に国交正常化を実現できたのも、このような布石があったからである。

七二年の日中復交とそれに続く日中航空協定交渉は、対中国政府以上に自民党内の親台湾勢力を中心とするタカ派との折衝に苦勞したが、脅しや嫌がらせにも屈することなく所信を貫いた。北京へ飛ぶ日航特別機が、台湾空軍によって撃墜されるかもしれないとの情報もあった。文字通り命がけの外交交渉だった。当時の大平外相は尿道結石で苦しんでいたが、鬼気迫るものがあった。

日本の外相として国益を無視したことはなかったが、それにとらわれ過ぎる国粹主義的なやり方を嫌った。やたらに外交を国内政治に利用すべきではない、という点でも強い信念を持っていた。佐藤内閣時代（六八―七〇年）に通産相を務めたが、日米繊維交渉をめぐる佐藤首相と対立し事実上、解任されている。当時、沖縄返還交渉を進めていた首相は、日本の繊維業界に対米輸出の自主規制を要求し米国の心証をよくしようとした。これに対し大平通産相は、自由貿易という大原則は軽々に崩すべきではないとの基本的立場から、米国とはねばり強く時間をかけて折衝すべきだと主張して譲らず、内閣改造の際、宮沢喜一氏と交替させられた。これなどは意図的に外交と内政をからませるべきではない、との信念にもとづいた行動であった。

### 堅実・地味な政治手法

大平氏は「拙速より巧遅」、「一利を興すは一害を除くに如かず」という言葉を好んだ。その政治手法は決して大向うをうならせるような派手なものではなく、堅実・地味なものだった。外交もその例外ではなかった。物事を奇をてらうことなく、無理せずにとんたんと処理した。「民主主義は時間と手間がかかるものだよ」というのが口ぐせだった。こういふやり方に物足りなさを感じ、批判する人がいたのも事実である。

佐藤内閣は長期政権の総仕上げとして、沖縄の祖国復帰を掲げた。「沖縄の祖国復帰なくして戦後は終わらない」と公言し、しかもその形態は米軍核基地の撤退による「核抜き本土並み」を目指した。当時、通産相を辞めさせられ反佐藤の立場にいた大平氏は、こういふ外交姿勢に批判的だった。「沖縄の核抜き本土並みなんて、猫が鯨に嘔みつくようなものだよ」と言って、冷やかな見方をしていたのを記憶している。

「織維で縄を買った」と言われたように、日本の織維業者を犠牲にした強引なやり方だったが、結果はほぼ佐藤首相の思惑通りに進んだ。返還実現後、大平氏に感想を聞いたことはないが、内心では自分とちがったやり方に舌を巻いていたのかも知れない。

大平政治は内政も外交も、深く広い教養に裏打ちされていたことはまちがいない。日本の政治家にはめずらしく、哲学をもった人物だった。どんなに忙しい時でも、週に一、二度は必ず本屋に立ち寄った。外相や自民党幹事長という多忙な日常の時代にも時々、行方不明になることがあった。しかし、こういう時は行きつけの二、三の本屋に電話すると、まちがいに欠かまらなかった。政界屈指の読書家だった。

大臣室でも自宅でも、寸暇を惜しんで本をひもといていた。内容も小説などの軟派ものではなく、歴史、哲学などの硬派ものが中心だった。古今東西の書を愛したが、国内ものよりも翻訳書の方が多かったようだ。読書の方法も赤エンピツを片手に持って、特に興味のあるところには赤線を引くという徹底したものだ。当然のことだが演説や講演の原稿は秘書まかせではなく、自分で書かないと気がすまなかった。日本経済新聞の「私の履歴書」は著名人の回顧録として高い評価を受けているが、登場する人物、特に政治家の大半は記者の聞き書きである。だが私が担当して書いてもらった大平氏のそれは、もちろん自筆である。

### 教養人・大平氏の面目躍如たるエピソード

教養人・大平正芳の面目躍如たるエピソードがある。七六年、衆院選で敗北した三木武夫氏は、その責任をとって首相と自民党総裁の座を降りた。この時、自民党の両院議員総会で松野頼三総務会長が、代表して三木総裁（首相）を送るあいさつをした。その最後を「ミネルヴァのふくろうは夕闇に飛び立つ」という言葉でしめくくった。知恵を表わす鳥であるふくろうは、日が暮れてから、すなわち仕事が終わって

から飛び立ち、目立ってくるという意味で、三木政治の評価は退陣したあと高まるのだということを書いたものである。

このくだりは松野氏に親しいジャーナリストが入れ智恵したもので、会心の言葉として自信満々だった。ところが自民党の議員からは何の反応もなく、松野氏ばかりして自宅に帰った。しかしその夜、大平氏から電話がかかってきた。「ミネルヴァのふくろうはよかったね。私も政治家のはしくれとして感銘をもって聞いた」という内容で、これには逆に松野氏も感激してしまった。当時、二人の間は必ずしも良い関係ではなかったが、それからしばらくの間、松野氏は「政界一の教養人は大平だよ」と、会うごとに吹聴してまわった。

大平内閣時代、学者や知識人を集めた私的な研究グループに諮問していた政策は、「田園都市構想」「環太平洋運帯構想」など、今になって脚光を浴びている。しかし、これらの構想は一部分が中間報告として存命中に出されたが、最終報告書は大平氏の死後になってしまった。どういうわけか、大平内閣を引き継いだ形の鈴木内閣は、この報告書にあまり関心を示さなかった。これに飛びついたのは、生前あまりソリの合わなかった中曽根康弘氏だった。

次期政権を狙っていた同氏は、大平氏の親友で側近だった伊東正義氏に「私が天下を取ったら大平政治を継承し、やり残した政策を実現したい」と訴えた。これまで二人の関係は決して良好ではなかったが、この一言で大平神社の神主を自認する伊東氏は協力を約束し、以後、中曽根内閣を支えることになる。大平グループの学者、知識人の多くはそのまま中曽根氏のブレーンとなり、八十年代の日本の政治に大きく貢献している。

大平内閣は突然の死のため二年弱の短命に終わった。しかし、その評価は事が終わってからです高まっていく。クリスチャンとしての信念、深い教養、先見性のある国際感覚、日本の政治家に欠けがちな

ものを持ち合わせていた大平政治は、死後一四年にして大きく花開いているといっても過言ではない。全智・全能の神の化身、ミネルヴァのふくろうは、大平氏が永遠の眠りについてから、その深みある政治を載せて飛び立ち、大きくはばたいている。

(日本経済新聞社常務取締役)